



システーナ礼拝堂の祭壇の壁面に最後の審判のイエス像があります。その真上にヨナの絵が描かれていて、イエス様と預言者ヨナとの強い繋がりが示されています。



よこしまで神に背いた時代の者たちはしるしを欲しがすが、預言者ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない。(マタ12:39)とイエス様が言われました。メシアならば、「しるし(証拠である不思議な力)」を示せと迫った律法学者たちにイエ

ス様はヨナのしるしを参照せよと答えられたのです。「三日三晩大魚の腹にいた」ということは「死と復活のしるし」(マタイ)であり、「ニネベの人を悔い改めさせた」ということは「福音宣教の力のしるし」(ヨハネ)であると聖書は解説しています。

ヨナはヤロブアム II の時代に名前が登場しています(列王下 13:25)ので、アッシリアの脅威の下に預言活動をした人物です。ヨナは預言者としての召命を拒否し、逃げた経験、いやいやながら預言者の勤めを行った経験、預言の言葉を敵が素直に聞いて悔い改めたことを不満に思った経験、木陰を作った木が枯れると死にたいと弱音を吐くなど、あまりに人間くさい人物です。それがイエス様と繋がりを持っているとは、なんとという光栄であり、なんとという不思議さでしょう。

ヨナは「さあ、大いなる都ニネベに行ってこれに呼びかけよ。彼らの悪は私の前に届いている。」(1:2)と敵国に悔い改めを迫るために行けと命じられました。異邦人、ましてや、敵国アッシリアの都ニネベに語れとは、イスラエル人にはありえない考えのはずです。ヨナをこのような状況に置くとはいふ不思議な物語です。ヨナは人込みに紛れて隠れ、逆方向に向かって逃げるため、船出しました。船は嵐に遭遇し、預言者ヨナは神の助けを求めるように祈れと船長から頼まれました。船乗りは遭難には神意を求めて籤を引くようですが、それがヨナに当たりました。ヨナは自分の職業と神から逃げるために、船に乗ったと告白し、嵐が収まるために人身御供となると言います。乗組員は苦渋の決断で、ヨナを海に放り込みました。すると海は静まり、人々は主を畏れて、祈りました。

神はヨナを巨大な魚に飲み込ませ、三日三晩を過ごさせます。ヨナは苦難の中、陰府の底に追放され、深淵に呑み込まれ、地の底まで沈み、扉は閉ざされた、と感じ、絶望状況で祈りました。

しかし、わが神、主よ／あなたは命を／滅びの穴から引き上げてくださった。／息絶えようとするとき／わたしは主の御名を唱えた。わたしの祈りがあなたに届き／聖なる神殿に達した。(2:8)

ヨナは主の御名を唱えたことが、自分の救いとなったことを喜び、自分の祈りが主に届いたと信じたのです。まさしくイエス様が十字架上で「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」(マタ 27:46)と叫んで死なれた、そして三日目に蘇られたことをヨナの体験から示しているのです。

大魚から吐き出されると、主は再びヨナにニネベ行きを命じました。ヨナは直ちに出かけました。敵国の人々に「ニネベは 40 日すれば滅びる」と叫びました。ニネベの人々は神を信じ、家畜も、牛、羊にいたるまで断食し、粗布をまとい、悔い改め、滅びを免れるように祈ったのです。ヨナの命を懸けた宣教が功を奏した、と言えるでしょうか。いいえ、ヨナ自身はあくまでも人間臭く、ニネベの人々が滅べば良いと思っていたし、悔い改めるとは信じられないことでした。これは神の業であり、しかも敵への伝道を、ヨナを用いて行いました。民族主義を越えた、世界主義が示されています。ヨナは「右も左もわかまぬ人間と、無数の家畜がいる」ニネベを愛する神の心を知らされました。

イエス様の言葉を信じたのは、律法学者たちではなく、罪人とさげすまれた人々であったのと同じです。「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」(マタ 5:44)と命じられたイエス様は、ヨナに与えられた使命を生きられたのだと思います。